

学内リサイタル講座

JOINT RECITAL 2

~Ses Variajo~

本日は学内リサイタル講座「ジョイント・リサイタル」においでいただき御礼申し上げます。洗足学園音楽大学のメインステージの前田ホールで、大学4年間の集大成の演奏を披露するために選抜学生39名による6回のジョイント・リサイタルを開催する運びとなりました。

各出演日の学生がそれぞれの思いで、プログラムや副題を決め、この日の為に準備をしておりました。専門コースの違いはあっても大きな会場で初めてのリサイタルを行う「責任と研究成果」を聴いていただければ大変な喜びとなります。出演学生が、その独自の構成と演出を競い、教員の講評審査を受けてこの舞台から巣立ち、現在は欧米各地に留学しコンクール入賞者や、国内外オーケストラ、教員、プレーヤーとして活躍する卒業生も多く、本学の講師として活躍するものもいるという喜ばしい実績を持っております。

この演奏会を基に日本の、そして世界の楽壇へと羽ばたく彼らに応援の拍手をお願いいたします。

学内リサイタル講座 教授 渡部 亨

本日は学内リサイタル講座、第2回『Ses Variajo』にお越しいただき、誠にありがとうございます。我々演奏者含め、芸術家にとって、非常に辛い年度の始まりを迎えました。先の見えない時代とは言われますが、昨年の今頃、誰もこのような事態になるとは思わなかったでしょう。お客様を集めることができなくなっても、どうか私たちの演奏を聴いてほしいと試行錯誤する方がたくさんいました。しかしながら、どんなに科学技術が発達しても、生の演奏をその場で聴くに勝るものはないと私は思います。大学生最後の年、私たちの不断の練習の成果を、どうか最後の一音までお楽しみください。

第2回公演 演奏者代表 クラシックギターコース 五十木翔太

2020年 10月 10日（土）18:00開演 17:30開場

洗足学園音楽大学 前田ホール

△新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

主催：洗足学園音楽大学・大学院

Program

1. 佐野陽歩 (Trombone)

Pf:小松祥子

E.ボザ / バラード

E.ボザはフランスの作曲家である。イタリア人のヴァイオリニストの父とフランス人の母との間に南仏ニースで生まれた。幼少期からヴァイオリンを学んだ後、パリ音楽院でアンリ・ビュッセル、ジャック・イベールらに師事、ヴァイオリン、指揮、作曲のいずれもプリミエ・プリを得て卒業し、1934年にはカンタータ「ルクマニの伝説 La légende de Roukmāni」でローマ大賞を獲得した。パリ・オペラ・コミックの常任指揮者や、エコール・ノルマルのヴァランシエンヌ校の校長も務めた。作品は、歌劇、交響曲、合唱曲など多彩ながら、今ではほとんど室内楽作品において知られる存在となっている。それらの作品の多くは、パリ音楽院の入試または卒業試験の為に課題曲であり、同曲は1944年の試験用に作曲されたものである。現在でもコンクールの課題曲になることが多く、トロンボーンの叙情的ピースの代表格である。冒頭は自由にたっぷりと歌える美しいメロディーで、半音階的で滑らかなフレーズが続いた後、カデンツァを経てスタッカートに伴う早い動きに至り、最後はちょっと小粋で機知に富んだファンファーレで終結する。奏者によって歌い方や表現の仕方に大きく個性が出るのがとても興味深く、聴きどころである。

2. 佐々木美緒 (Flute)

Pf:岡本有子

C.シャミナード / コンチェルティーノ

C.シャミナードは、フランスの作曲家。父はヴァイオリンを弾き、母はピアノと声楽を嗜む裕福な家庭で生まれ育った。幼少期からピアノを母の教えで始め、作曲も試みていた。オペラ作曲家のG.ビゼーはシャミナード家と親交があり、彼女が幼い頃作曲した曲を聴くと「小さなモーツァルト」と呼び可愛がっていた。19歳でピアニストとしてデビューした後、作曲家としても認められた彼女は、22歳でオーケストラ作品やバレエ音楽などを始めとする作品を数多く手がけている。若き女性作曲家への嫉妬から不遇の時期もあったが、彼女の音楽には根強い聴衆の人気があった。

《コンチェルティーノ 作品107》は、1902年にパリ音楽院からフルート科の修了コンクール課題曲として委託され作曲された。原曲は管弦楽とフルートのために作曲された単一楽章の曲。今ではフルートとピアノのデュオ版も有名である。「この曲には、フルートという楽器に課せられたあらゆる技巧が含まれています。」と彼女は綴っている。曲はゆったりとした甘く美しい主題から始まり、主題が転調していく。途中で細かな技巧があった後、カデンツァが奏でられ主題に戻る。最後は素早いパッセージがあり華やかに終結する。

3. 高原百合香 (Euphonium)

Pf:岡南健

J.スティーブンス / ユーフォニアム協奏曲

ジョン・スティーブンスは、1951年にアメリカ合衆国ニューヨーク州バッファローで生まれる。長年ニューヨークに拠点を置き、フリーランス奏者として活動した。また、大学の教授なども務め、教師、演奏者、指揮者、作曲者、編曲者として多岐にわたる活動を行っている。

第1楽章、AllegroはD、E、Gをテーマとしたモティーフによって構成されている。テンポは、緊迫感のあるAllegroとなり、疾走感に包まれ、曲は進行する。音の調和と破壊を繰り返しながら何度もユーフォニアムが頂点を迎え、殺伐としたメロディは大成することなく消えていく。その後は目まぐるしくリズムが変わり、Cadenzaに突入する。徐々に物語は終焉を匂わすが、それを払いのけるように12/8のリズムをピアノが奏し、そのまま突然に第1楽章は終了する。

第2楽章、Adagio espressivoは第1楽章と対局的緩徐なテンポから始まる。決して温かい響きではない、複雑なピアノの和音も示しているどこか冷たい空気が漂う。第1楽章で登場したD、E、Gのモティーフで使用されたリズムが音を変えて登場し、テンポを揺らしながら、同音連打のモティーフへ推移する。それを引きずるユーフォニアムのロングトーンによって曲は幕を閉じる。

第3楽章、Vivace energicoはより疾走感のあるテンポとなり、半音階を匠に使用しながら激しくピアノと衝突を繰り返す。拍子を何度も変え、Cadenzaに突入する。しかし、第1楽章と異なり頂点は繰り返さず、淡々とした半音階のモティーフを形成する。その後は、冒頭のユーフォニアムの雄叫びを彷彿させる、頂点を迎え、曲は終了する。

4. 高橋遥 (Bassoon)

Pf:森りか

W.A.モーツァルト / ファゴット協奏曲 変ロ長調 KV191

この曲は、18歳の青年モーツァルトが初めて作曲した管楽器のための協奏曲である。1774年、彼がザルツブルクからミュンヘンに、オペラ『偽の女庭師』（K.196）の上映のために父と2人で旅行した。その際に出会ったデュルニッツ男爵という人物は、ピアノとファゴットの名手として知られる音楽愛好家で、著名な作曲家にファゴットのための作品を多数書いてもらうほどであった。そんな男爵のためにモーツァルトが作曲したのがこの作品である。モーツァルトの作品の中で、現在も確立して残されているファゴットのための協奏曲はこの1曲のみである。

第1楽章 アレグロ 変ロ長調 協奏風ソナタ形式。

18歳の青年らしい明るく澁刺とした曲想の中に、レガートやスタッカートの対比、幅広い跳躍進行といったファゴットの特性が存分に織り込まれている。

第2楽章 アンダンテ・マ・アダージョ へ長調 展開部を省いたソナタ形式。

優しく包まれるような音色に相応した穏やかな曲想の中にも、音域の広さがさりげなく誇示するように表れる。

第3楽章 ロンド テンポ・ディ・メヌエット 変ロ長調

華やかな中に敏捷性やユーモアがある、ギャラント様式の作品によくみられるメヌエット風のフィナーレ。

5. 五十木翔太 (Classic Guitar)

H. ヴィラ＝ロボス/ギターのための5つの前奏曲より 1番、3番、5番

H. ヴィラ＝ロボスは1887年、リオ・デ・ジャネイロに生まれた。独学で作曲を学び、クラシック音楽の技法にブラジル独自の音楽を取り込んだ作風で知られている。今回演奏する5つの前奏曲は1940年夏頃に作曲され、アルミンダ夫人に捧げられた。ヴィラ＝ロボスのギター独奏曲としては最後の作品に当たる。近年の研究により、世に回っているヴィラ＝ロボスの楽譜は必ずしも作曲家のオリジナルの意図をよく反映したものとは言えないことがわかってきているが、この作品は他と異なり、手稿譜と出版譜に大きな違いはない。各前奏曲には副題が付いているが、これらは第一次資料に見えず、1970年代頃から次第に流布したものと考えられる。今回はその中から第1番、第3番、第5番を抜粋して演奏する。

第1番「叙情のメロディー」ホ短調

チェロ風の雄大な低旋律に見られるように、ロマン派からの影響を強く受けている作品である。

第3番「バッハへの賛歌」イ短調

ヴィラ＝ロボスはバッハを敬愛して止まなかった。バッハの影響を強く受けた作品に、Bachianas Brasileirasがあるが、本作品はそのギター独奏版といった趣がある。

第5番「社交界への賛歌」ニ長調

本作品は都会的な洗練された楽想を持っている、品の良い穏やかな旋律となっている。また、この曲にはこれまでヴィラ＝ロボスが書いてきた全てのギター曲の要素が込められている。

6. 浅野汐音 (Saxophone)

Pf: 原田愛

P. ヒンデミット /

ヴィオラとピアノのためのソナタ(アルトサクソフォン版)

P. ヒンデミットはドイツの作曲家。ヴィオラの名手であり指揮者。若くして作曲家としての名聲を確立したヒンデミット。ベルリン音楽大学の作曲家教授をつとめる傍ら、オペラ、映画音楽、あるいは電子楽器トラウトニウムのための音楽など幅広い活動を行い、自ら演奏するためのヴィオラやヴィオラ・ダモアレのための曲も書いた。

「機能と声」や「調性」が崩壊する時代の中で彼が求めたものは秩序と客観性であり、自身の著書に【音楽が存在する限り、長三和音から出発し、再び戻る】(『作曲の手引』より)という言葉で無調音楽を非難した。

ヒンデミットによる、ヴィオラソナタ 作品11-4。彼が作曲したヴィオラ作品は数作あるがこの作品は1919年という大変な時代にワイマール共和国の産声とともに生まれた。(第一次世界大戦後のドイツ革命によってドイツ帝政は崩落した)

第1楽章 『Fantasie』

Ruhig…穏やかで静かな始まり。幻想的且つドラマティックな香りが印象的な構成となっている。

第2楽章 『Thema mit Variationen』

Ruhig und einfach, wie ein Volkslied…穏やかに、そして素朴に、民謡のように。テーマがさまざまな形で断片的に登場する。

今回は第1変奏を抜粋してお届けする。

第3楽章 『Finale (mit Variationen)』

Sehr lebhaft…非常に生き生きと。フィナーレと変奏という題名がついている通り、ここでは第5変奏から第7変奏が組み込まれている。

穏やかになったと思えばグロテスクで滑稽な表現が垣間見えたり、激してみたり。表情や香り、温度が千変万化するヴィオラソナタをサクソフォンという楽器でお届けします。